

第30回千葉県建築文化賞選考経過と総評

応募68点から9点を表彰



千葉県建築文化賞検討会議委員長 北原 理雄

(選考経過)

第30回千葉県建築文化賞は令和5年6月の検討会議で募集要領を定め、7月上旬から9月下旬まで応募を受け付け、総数68点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

応募作品は、施工が新型コロナウイルス感染症の蔓延期と重なるなど、その影響を受けたものが少なくなかったが、前回の50点を上回る結果となった。困難な状況のもとで力作に応募・推薦して下さった皆さまに深く感謝したい。

一次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真をもとに投票を行い、一般建築物9点、住宅4点を選んだ。次いで11~12月の4日間をかけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。二次選考は12月開催の検討会議で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある建築物が応募している場合は、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、入賞4点を表彰候補作品として決定した。

今回は新型コロナウイルス感染症が5類に位置づけ変更になり、種々の規制・制限が緩和されたが、検討会議は前回と同様に座席間隔を広くとり、オンライン参加を導入して開催された。準備に奔走していただいた事務局に心から感謝したい。

募集部門	選考経過	応募総数	現地調査 (第1次選考)	受賞作品選定(第2次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		40	9	1	2	4
住宅		28	4	0	2	0
合計		68	13	1	4	4

(総評)

一般建築物の部への応募は40点であり、昨年度の25点を大きく上回った。幅広い用途の作品が寄せられ、表彰にいたらなかった作品にも質の高いものが多かった。

最優秀賞の「キッコマン中央研究所」は、江戸時代から醤油づくりが行われてきた街に立地する研究所の建て替え計画である。周囲に点在する伝統的な街並みとスケールを合わせて2階建てとし、随所で外部に視線が抜ける建物になっている。1階に実験エリアが置かれ、2階にはオフィス、カフェ、吹抜け、テラスなどが市松状に配置され、切妻屋根の集合体が光と風を取り入れている。「自然の移ろいを感じられ、研究者が楽しく働ける環境」という建築主の要望にみごとに応えた建築である。

優秀賞の「the RECORDS」は、築35年のビジネスホテルを大改修し複合商業施設に転用したプロジェクトである。隣接する公園とのつながりを生むため、1、2階を開放的な店舗とし、3、4階をオーナーのオフィス、5階を会員制飲食店としている。既存建物を活用しつつ地域の活性化をはかる建築主の心意気が、内外のデザインにも反映している。

「三井化学 袖ヶ浦センター リニューアルプロジェクト」は、竣工後35年を経過した研究所の改修プロジェクトである。既存建物の水平に広がる開口部と成熟した外部環境を活かし、内外が連続する交流空間を生みだしている。設計に先立って若手社員中心のワーキンググループを立ち上げ、DIYによる小規模改修を実施した取り組みも魅力的である。

入賞の「café madoi」は、バス通り沿いに立地する細長いカフェである。道路沿いの庭に面して大きなガラス面を開き、床の高低差を使って緑との多様な距離感を演出している。歩道沿いの緑のなかに設けられたベンチも好感が持てる。「蔵元飯沼本家主屋」は、築350年余の主屋を大改修し、住宅から飲食店に用途変更したものである。困難な法的条件をクリアし、先祖から受け継いだ建物を後世に受け渡そうとする熱意が伝わってくる。「有限会社 和楽 ギフトSHOPわこう」は、重要伝統的建造物群保存地区の一角、小野川沿いに建てられた木造店舗である。1階にカフェとギフトショップ、2階に民泊が入った下見板張り、棧瓦葺きの建物は、周囲の伝統的建物とよく調和している。「道の駅しょうなん てんと(直売所棟)」は、手賀沼のほとりに建つ道の駅の拡張プロジェクトである。勾配屋根が連続する大屋根ひろばは地域の新しいシンボルを目指し、催事空間としても活用されている。

住宅の部への応募は、昨年度を3点上回る28点であった。質の高い作品も散見したが、全体として住まい方への積極的提案がやや弱いように感じられた。

優秀賞の「たがやすいえ」は、南に鋸山、西に三浦半島と富士山、北に東京湾を一望する山頂の住宅である。この一帯は、かつて宅地開発で尾根が削られ、樹木が切り倒されていた。計画は、植生が戻りつつある尾根の環境復元を手助けする思いを込め、崖の安息角に留意しつつ建物を配置したという。

「おおたかの森の住宅」は、既存住宅地の一角に新築された住宅であり、中廊下をはさんで各室を配置したプランをとっている。中廊下は幅2m強、天井高約6m、外壁ガラス張りのゆったりした明るい空間であり、サンルーム、ホール、テラスなど、諸室の延長として家族の生活をつなぐ多彩な機能を持ち、玄関の地窓を通して、プライバシーを保ちつつ街ともつながっている。多くの住宅地で更新が課題となっている現在、ひとつのあり方を示す事例である。

一般建築物の部

住宅の部